

女性がん患者が抱く妊孕性温存治療に対する困難や不安について

—がん告知から生殖医療を再開し胚移植までの時期を通して—

茅切 純子¹ 太田 恭子¹ 竹林 七重¹ 中西 佳与¹ 松山 由紀子¹

橋本 知子¹ 中岡 義晴¹ 森本 義晴²

1,IVF なんばクリニック 2,HORAC グランフロント大阪

【目的】

当院ではがん治療後、生殖医療を再開する患者が増えている。これまで行ってきた看護支援が患者のニーズに沿っているかを把握する為、患者へインタビューを行った。今後必要な看護支援が明らかとなったため報告する。

【方法】

がん治療後、生殖医療を再開した女性がん患者 3 名に、インタビューガイドに基づき半構造的面接を行った。がん告知から生殖医療を再開し胚移植した時期を 6 段階に分け、それぞれの時期に感じた生殖医療に対する思いと、当時の困難や不安を抽出した。

【結果】

6 段階のうち生殖医療看護師が関わる時期は、がん治療前の「当院受診後から妊孕性温存治療を決定するまで」「治療決定から採卵まで」と、がん治療後の「妊娠に向けて当院受診後」「当院受診後から胚移植まで」の 4 つの時期である。がん治療前は「忙しすぎてほとんど覚えていない」「凍結が出来てよかったということは覚えている」「たくさんいろいろ言われてもわからなかった」「早くがん治療に戻らなければと思っていた」等生殖医療よりもがん治療に対する発言が多くあった。一方がん治療後は「凍結胚があれば妊娠できる」「こんなに時間がかかると思っていなかった」「がん治療に戻るのに時間がない」等生殖医療に対する発言が多かった。

【考察】

がん治療前は、がん治療への不安の中で妊孕性温存治療を行う事による精神的負担や、採卵に伴う身体的負担の増加が考えられる。選択した妊孕性温存治療が肯定できるよう、妊孕性温存治療が患者への更なる負担とならないようサポートすることが必要であることがわかった。また、がん治療後は、将来のことに目を向け妊娠への期待も高くなり易い。妊孕性温存治療における妊娠について理解出来るような情報提供を不妊治療再開前に行う必要がある。生殖医療を行える期間は個々で違うため、限られた時間の中で納得した治療が行えるよう、患者と共に治療計画を具体的に立案していく必要があると考える。